

## 黄金律 マタイ7章12節

学院長 嶋田 順好

黄金律とはイエスが山上の説教で語られた「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（マタイ7章12節）という聖句のことを指しています。似た表現ですが『論語』の中で孔子は「己の欲せざる所を人に施すなかれ」と説き、こちらの方をSilver Ruleと呼ぶこともあるようです。確かに両者は似ていますが、イエスは「してもらいたいことを人にしなさい」と積極的・肯定的に説き、孔子は「欲せざる所を人に施すな」と否定的・消極的に説いています。実は孔子と同様の教えを、ギリシアの歴史家ヘロドトスも、ユダヤ教のラビ・ヒルレルも説いているのです。

つまりイエスの時代のギリシアやパレスチナの周辺世界でも、一般にこの教えは否定的・消極的の形をとって広く流布していたということでしょう。考えてみれば古今東西の高名な人の名前を出して来るまでもなく、私たちがまた、この教えを極々素朴な日常生活の営みの中で口に出していることが多いはずで、大抵の場合は、親や教師が自分の子どもや生徒を教え諭す場面です。そんな時、自ずと私たちの口をついて出てくるのは「自分がしてほしいと思ふことを友達にははいけませんよ」という忠告や叱責の形をとるのです。

思うにこういう否定的・消極的表現は、自ら何か事を起こそうとする意欲を削いでしまうような感じがします。結局、隣人と関わりを持つことなく無関心を決め込み、自分の方から働きかけない方がよいということになりかねません。それに対して似たような表現ですが、イエスは、積極的・肯定的な表現を用いられました。自分がこうして欲しいと思ふことを人のためにどんどんしてあげなさい、と。些細な違いのように思われるかもしれませんが、実は大きな違いです。そこにこそイエスの独自性があり、その隣人に積極的に関わろうとする生き方こそ、イエスが我々にもたらしてくださった愛の本質であるに違いないからです。

ところで私たちが自分の生活の歩みの中で「人に何かをしてもらいたい」と切実に思う時は、どんな時でしょうか。言うまでもなく辛い時、悲しい時、苦しみが続いて耐え難い時ではないでしょうか。つまり、神の恵みと祝福が、自分の人生のなかで見えなくなる時です。そういう試練の時こそ、人に助けてほしいという願い求めがほとぼしるように湧き上がってくるに違いないのです。まさしくその時、そこでイエスは私たちに向かって言われます。「何でも人にしなさい」と。「何でも」ということは、自分の心に湧いて来る願いの一切ということでしょう。苦しみや試練のなかで、誰かに何かをしてもらいたいと思います。それは当然のこととして許されるだろうと思ふのです。そのような時にまさしくそこでイエスは、その自分の願い求めだけにこだわっていてよいのか、あなたの周りにも、等しくそのようにして欲しいと願っている人がいることを思い浮かべられないのかと問うておられるのです。

つまり、ここでイエスはすでに十分に報いを受けている人に、あなたは既に神からも、人からも存分に良いことをしてもらったのだから、今度はお返しをする番だよ等と暢気なことを仰っておられるではありません。事実、この言葉が語られるすぐ前のところで、「求めなさい。探しなさい、門を叩きなさい」とイエスは励ましておられます。つまり、ここで求めずにはいられない、探さずにはいられない、門を叩かずにはいられない、欠け多き試練の中で苦しみに喘ぐ者に向かって呼びかけておられるのです。その欠けを知るが故に、その痛みを知るがゆえに、その苦しみを知るが故に、人から何をしてもらったらよいかをよく知っている人間、その人は、本当に隣人のために心を配り、共に生きることができると言われるのです。本当の思いやりとは、そういうものなのではないでしょうか。そしてそのような隣人愛を貫かれた方がイエスその方だったのではないのでしょうか。

「神を畏れ、隣人を愛する」ということをスクール・モットーとする教育研究共同体に連なる私たちが、園児、生徒、学生、院生と向き合うときに、この黄金律を心に刻み、この黄金律が示す愛の地平に立ちつつ、一人一人の園児、生徒、学生、院生に関わるものでありたいと切に願うものです。